

ブレーメン経済工科大学
交換留学報告書

静岡県立大学

国際関係学部国際言語文化学科 3年

私は、2019年9月から、2020年3月までの約7ヶ月間、ブレーメン経済工科大学（Hochschule Bremen）での交換留学を行った。本来、一年間の留学期間を計画していたため、コロナウィルスの流行に伴う非常措置としての、強制帰国という形で留学期間が短くなってしまったことは不本意ではあったが、この7ヶ月は間違いなく私にとって、自分の価値観に大きな影響を及ぼした、とても忘れがたい経験となった。

まず、私は、日常生活で英語に触れている時間を増やしたいと思い、シェアハウスに住むことを決め、スペイン、ポルトガル、メキシコからの留学生、そしてもう一人の日本人、5人での生活をした。そこでは、言語の壁以上に、文化の違いから生じる生活習慣の違いに苦しんだ。フラットメイト達は、多くのイベントやパーティーに私を誘ってくれた。こちらで友達の輪を広げたい私にとって、それはとてもありがたい。最初のうちは喜んで参加していた。しかし、毎週末、時には平日にも開かれるパーティーに参加することがつらくなってしまった。それから、毎日のように、家に誰かが連れてきた知らない人がいることや、家での誕生日パーティーなどにそれぞれが全く知らない友達を連れてくることにも、もともと初対面の相手と話をするのが得意ではない私は、ストレスを感じていた。だがある日友達に、「誘われても、素直に No といえば良いし、無理に全員と仲良くなる必要はない。」というシンプルなアドバイスをもらい、確かにその通りだと納得した。それから、誘いを断っていやな顔をされる

こともなかったし、面識のない人とでも、その場を楽しむための会話だと思えばラフに話すことができ、様々な人と接することで、視野が広がるような話をたくさん聞けたと思う。それは、今まで人との関わり方の正解を勝手に作り上げていた私の固定概念が崩れた瞬間であった。思い返せばフラットメイト達との生活の中で私は、幾度となく固定概念が覆され、その代わりに新しい価値観を教えてもらった。そしてみんなで、街を散策したり、移動遊園地に遊びに行ったり、旅行をしたり、ご飯を食べたりしたこともかけがえのない思い出である。

次に、大学生活について触れたいと思う。私は、3年後期からの留学だったこともあり、留学決定直後はもともと、半年間留学するつもりでいた。しかし、半年間ドイツ語の基礎を固めた上で、もう半年間は現地の大学生が受けている授業を同じように受講したいと考え、1年間に延長した。そのため、前期に私が受けた授業は、German as a Foreign Language という授業の A2.1 と A2.2 の二つのみである。A2.1 のクラスは、文法事項を先生が英語で解説していくという形で進められた。県大のドイツ語の授業で、文法事項については一通り学び終えていたため、この授業は正直、英語のリスニング練習という感覚であった。一方もう一つ A2.2 のクラスは、学生の発話メインで進められた。日本で会話練習をほとんどしていなかった私は、先生の質問を聞き取ることすらままならず、授業が始まって最初の頃は、質問が自分に飛んでくるのが怖くて仕方なかった。そんな中で、自分のドイツ語力向上の助けになったのが、タンデ

ムである。タンデムとは、自分の母語を学びたい相手と、相手の母語を学びたい自分が、互いに母語を教え合うもので、ドイツなどでは一般的なシステムである。私の通っていた大学には日本語学科があり、そこで日本語を教えている先生が、私たち日本人留学生と、日本語を学ぶ学生とのタンデム関係を斡旋してくれたのである。私は、授業数が少ないため空き時間も多く、ドイツ語に大きな不安を感じていたため、10人ほどの学生とタンデムを組んでもらい、毎日2、3人とタンデムをした。タンデムを毎日することで、ドイツ語に触れる時間も増え、タンデムを通して仲良くなったドイツ人と、もっとドイツ語で会話できるようになりたい、相手の日本語の上達を実感し、負けていけないという感情が、ドイツ語学習のモチベーションにもなった。最初は、英語をベースにして会話を進めていたが、徐々にドイツ語と日本語が増えた。学校終わりにご飯を食べに行ったり、休日にスポーツをしに行ったりしたときも、ドイツ語で話しかけることを心がけるようになっていた。そうして、質問におびえていた授業の中でも、先生の質問を理解し、答える、さらには先生と会話のやりとりもできるようになった。最初は何も理解できなかった言葉を、理解できるようになってくると実感できることが楽しかったし、単語はもちろん、文法構造も日本語とは全く異なるドイツ語という言語そのもの、そして、言語から垣間見えるものの考え方の違いの面白さに気づくことができたように思う。

また、私は、留学前からヨーロッパの社会システムに興味があったのだが、半年

間、ドイツの社会システムの中で生活し、日本との違いを、身をもって感じた。まず、道行く人々にお金を乞うホームレスの人々の多さ、彼らにお金や食べ物を渡すことが習慣化していること。それから、瓶やペットボトルを専用の機械に返すとデポジットが帰って来るという制度や、環境に配慮した BIO 商品の需要の多さ。また、銀行に手続きをしに行きたいと思っても、13時には閉まってしまうため、学校帰りには間に合わない。日曜日にはスーパーを含めほとんどの店が閉まるので、とても不便である。私は、日本での便利な生活に慣れてしまっていたため、ドイツでは不便に感じるが多々あったが、毎日家族全員で夕飯を食べることが当たり前であるドイツの家庭を想像すると、日本の便利さの裏にあるものを考えてしまうなど思った。また、私が特に興味深く思ったのは、アビトゥーアという制度である。私はこの制度について、合格すれば大学に入学する権利を得られる無期限の資格である。というほどに考えていた。実際大学には、本当に様々なバックグラウンドを持つドイツ人学生が集まっていることに驚いた。私は、日本語を学ぶ学生と関わるが多かったのだが、年齢も、経歴も、出身地も全く異なる学生達が、日本語を学ぶために集まっているのである。途中で進路を変えることも可能だから、そこには、本当に日本語と経済学を学ぶ意思のある学生だけがいて、意識と意欲の高さに感心したし、感銘を受けた。

もともと私は、英語、ドイツ語の語学力向上と、興味のあるドイツ文化の中で生活してみたいという理由から、今回の交換留学を決めた。しかし、ドイツは移民も多

く、多国籍の人々が暮らし、留学生も多いため、外国語を使った生活、多様な文化を経験できたことはもちろんだが、それ以外にもこの留学で得たものは、想像以上にある。留学中、私は、ふと考えたことがあった。「ペットボトルをポイ捨てすることは良くないことだが、道ばたで生活する人々の明日は、誰かが捨てたそのボトルで作られるのかもしれない。それなら、そのボトルのデポジットとして返ってきたお金を直接渡せば良いのではないか。でも、ボトルを拾って、それをデポジットに換えることで、環境保護に貢献した報酬としての50セントと、現金として直接渡された50セントはきっと同じではないだろう。」そのとき、今まで以上に、ホームレスの問題も、環境問題も、とても身近に感じている自分がいた。それから、コロナウィルスの流行により、なるべく早く帰国しなければならないという状況になったとき、一緒に帰国した他の日本人はもちろん、急な帰国決定での慌ただしい手続きを手伝ってくれ、また会おうと送り出してくれたドイツ人の友達や、自分達も大変な中、心配してくれた他国からの留学生に本当に助けられた。私はその中で、予定期間滞在できなかった無念さと、徐々に帰路が経たれていく不安の中で、世界共通の人の温かさを感じた。多くのことを学び、気づけた、このような貴重な経験をさせてもらえたことに感謝し、今後に生かしていきたいと思う。